

海外の話題

欧州の多言語主義

農林中央金庫 前ロンドン支店長 曽我 道正

欧州連合（以下「EU」）の関係機関を訪問した時のこと。出てきたのは、ドイツ系・イタリア系など出身国の異なる人々で、当方は日本人であるため、共通の言語として自然と英語での会話になった。いずれも英語を母国語としないため、話すスピードは比較的ゆっくりであったが、先方の一人は英語がさほど得意ではないのか、時おり顔を歪めながら単語を頭から搾り出すように話していたのが印象的だった。しかし、話している内容は高度で、時折ほかの同僚とはフランス語らしき言語で意思疎通をしており、英語以外の複数の言語を流暢に操るようだ。このような機関には加盟各国から俊才が送り込まれ、優秀な人材が集まっているが、操る言語は必ずしも英語とは限らないようである。

EUには現在27ヶ国が加盟し、23の言語が公用語とされ、公式文書は原則としてこれら23の言語に翻訳され、公式会議でも同様に通訳されるとのこと。これにかかる時間と費用は膨大なものであろうが、EUのモットーたる「多様性の中の統合」を進めるための必要な対価と考えられているようである。隣国同士の争いを繰り返した挙句に疲弊してしまった欧州の歴史を踏まえ、ローラーで全て画一化するような手法とは一線を画し、互いの言語と文化を尊重することで平和的共存を図る、そのための必要コストであるという腹の括り方については、なるほどと頷くことができる。ただ、関係機関内部での日常的な実務コミュニケーションにまで通訳や翻訳を入れるのは困難なはずで、いったい何語で意思疎通が行われているのだろうか。調べてみたところ、英語、ドイツ語、フランス語の3ヶ国語が中心のようで、先述のように英語以外の言語が得意な人もいるため、英語で統一という訳ではなさそうである。

EUでは、どの言語に対しても等しく価値を認めて尊重する「多言語主義」をとっており、この考え方の下で「すべてのEU市民は母国語以外に少なくとも2つ以上の言語を使うことができる」よう推進することになっている。欧州委員会（EUの執行機関）の調査によると、EU市民の約半数が母国語以外の言語で会話できるとされ、母国語以外に2つ以上の言語を使えるレベルに達しているのは25%とのこと。中でも、母国語以外の言語として一番通りが良いのは、やはり英語のようである。さりながら実感としては、欧州首都を自任するブリュッセルでさえ街の中には英語の併記がまだ少なく、フランス語を解さない人間としては戸惑うことが時々ある。

そんな折、英国ではEU離脱を訴える世論の動きが報じられている。EU離脱によるデメリットを懸念して反対する意見がまだ主流だろうが、実際に離脱となると世界の中での英国の立ち位置がどう変わるだろうか。また、英国の抜けたEU諸国での英語の通りはどうなるだろうか。世界レベルでの英語の地位に大きな変化がなければ、アイルランド等、EUには他にも英語を使う国があるので、引き続き使われ続けるだろうが、一般での英語の通りが今より良くなることはないかもしれない。日本人であっても、欧州で仕事をする人間ならば多言語主義への対応がより重要になるのだろうか。今後の動向を見守りたい。